ナル事ハ御分リノコト考ヘマス即チ本邦ニモ Spaetrhachitis ナルモノカアルト思ヒマス

再言スレハ私ノ今日諸君ニ述ヘル要點ハ只 Rhachitis ハ本邦ニ於テ敢テ非常ノ稀症デハナキ事デアリマス而シテ Baelz 先生カ二十年間一人モ見ナキ處ヲ以テ見レハ本病ガ本邦中或ル地方ニ多ク他地方ニ少キニアラサル乎ノ疑ヲ生シタルコデアリマス尚一ハ Spaetrhachitis ナルモノハ今日ノ學術ノ程度ニ於テ之レアルモノト見做シテ可ナラント思ヒマス且ツ Spaetrhachitis モ亦本邦ニ稀有ノ症ニアラズト私ハ申シ度キノデアリマス　（完）

抄録

●重症ノ汞毒性發疹ニ就テ

（Dermatologische Zeitschift, Bd. VIII. Heft 1. 1901.）

アルフレード、ベルリーチル Alfred Berliner 氏報シテ曰ク四十二歳ノ從來健全ナリシ婦人梅毒ヲ感染シ塗擦療法ヲ行ヒタリシニ既ニ第一回ノ塗擦後（灰白水銀軟膏約三・〇）兩脚ニ發疹ヲ來シ塗擦ヲ止メタル後モ該疹ハ全身ニ蔓延セリ乃チ患者ノ狀態ヲ視ルニ顏面ハ浮腫狀ニ腫脹シテ潮紅シ全軀幹ニハ毛囊口ニ一致スル部分ニ許多ノ皮下溢血斑ヲ呈シ其周圍ノ皮膚ハ猩紅紅色ヲ

呈シ該色ハ壓ニ由テ消褪シ且ツ此部ニ糠粃樣若クハ葉狀ノ表皮剝脫ヲ來シ四肢モ同樣ニ侵サレタルモ只手足ノ背面及前膊ニハ廣キ扁平ノ水疱ヲ生ジ此水疱疹ハ次日ニ至リ患者肺炎ニ罹ルニ及ビ其數ヲ增シ一時虛脫狀態ニ陷井ルニ至リシガ漸ク之ヲ恢復セシメタリ斯クテ四肢ノ水疱ハ乾固シタリシモ治後著シキ色素ノ沈著ヲ貽シ患者ハ後チ久シク著シキ瘙痒ヲ訴ヘタリ

著者ハ上記ノ症例ヲ以テ水銀中毒症ト看做サズ（用量僅少ニシテ尿中亦水銀ヲ證明セズ）之ヲ患者ノ純粹ナル特異素因ニ歸シタリ　（南溪生抄）

●本邦人ノ常尿ニ就テ

（岡山醫學會雜誌、第百三十五號）

醫學士舟岡英之助氏ハ岡山醫學專門學校生理學教室ニ於テ本題ニ就テ研究セラレ左ノ如ク結論セラレタリ但シ氏ノ檢査ニ供セシ尿ハ本邦中流以下ノ概シテ植物性食物ヲ取ル十九名ノモノナリト云フ

（一）本邦人ノ尿量ハ體量ノ大小ヲ斟酌スレバ敢テ歐米人ノ尿量ト大差ナシ

（二）本邦人ノ尿ノ反應ハ大抵酸性ナリ

（三）尿ノ比重ハ東西人ノ間ニ大差ナシ

（四）尿素ハ吾人ノ調査シタル尿ニ於テハ其量甚ダ少ナシ即チ歐米人ノ尿ハ平均二％ヲ含ミ吾人ノモノハ僅カニ一・一六％ヲ含ムノミ但シ大澤博士、梶田學士ノ定量シタル尿ハ體重ノ大小ヲ斟酌スレバ歐米人ノ尿ニ比シテ其尿素含量ニ大差ナシトス

（五）食鹽ノ含量ハ本邦人ノ尿ニ多シ就中吾人ノ

調査シタル所ノ尿ハ非常ニ食鹽ニ富ミ一・四三%ヲ含ム(歐米人ノ尿ハ一・〇%ヲ含ム)體重ノ大小ヲ斟酌スレバ其差益々大ナルヲ見ル

(六)燐酸ハ梶田學士ノ成績ヲ除クノ外ハ本邦人ノ尿ニ少ナシ就中吾人ノモノニ於テハ含量甚ダ少ナク僅カニ〇・〇九六%ヲ含ムノミ

(七)硫酸ノ含量モ亦梶田學士ノ成績ヲ除クノ外ハ本邦人ノ尿ニ少ナシ　(南溪生抄)

●梅毒ト脊髓勞及進行性麻痹トノ關係ニ就テ

(Wien. med. Wochenschr. 1900. No. 33.)

マルク、ベルマン Mark Bermann 氏ハ梅毒ニシテ果シテ脊髓勞及進行性麻痹ノ原因タルヿ確實ナル片ハ梅毒ノ多キ邦土ニ於テハ此二疾患モ亦必ズ多カラザルベカラズト論シ氏ハ一千八百九十五年ヨリ九十九年ニ至ル五年間梅毒ノ蔓延著シキポスニア及ヘルツェゴウヰナニ於テ此問題ニ就テ調査シ反對ノ成績ヲ得タリト即チ二萬三千ノ人口ヲ有スル一部落ニ於テ前記年限中ニ大約一萬五千人ノ患者アリタルガ此中梅毒患者四百六十四人ニシテ多クハ第三期性ノ者ナリシモ脊髓勞及ヒ麻痹患者ハ一人ヲモ見ルヿナカリシト云フ　(南溪生抄)

●疥癬ニゑぴかりんノ試用

(Münch. med. Wochenschr. 1900. No. 43)

エス、シーベルト F. Siebert 氏ハゑぴかりんハ腎臟刺戟症狀ヲ發スルヿ少カラザルヲ以テくれそちん酸及「ベタ」なふとーるノ濃縮產物タルゑ

ぴかりん（Epikarin）ヲ疥癬患者ニ試用シタリ氏ハ其一〇％軟膏ヲ數多ノ患者ニ三日間全身ニ塗擦セシメタリシガ奏効顯著ニシテ而カモ毫モ有毒作用ヲ見ルヿ無ク且ツ本劑ハ無色無臭ナルヲ以テ最モ使用ニ便ナリ但シ不利トスル所ハ屢々疥癬ニ伴フ濕疹ニ對シテ毫モ治効ヲ奏スルコト無ク反テ間々之ヲ增惡セシムルニ在リト

（南溪生抄）

●疥癬療法ノ追加

（Dtsch. med. Wochenschr. 1900. No. 39.）

エル、ザックス R. Sachs 氏ハ疥癬ノ療法ニ一新藥ヲ賞用セリ該藥ハ名ヲぺるゾーる（Perzol）ト稱シ氏ハ之ヲナイセル氏くりにっくニ於テ用ヰタリシガ刺戟ヲ防ガンガ爲メ之ヲ三倍ノ苴麻子油ニ和シテ用ユト而シテ其長ズル所ハ確實ニ疥癬蟲ヲ殺シ毫モ皮膚及內臟器ヲ刺戟スルヿ無ク無臭ニシテ又皮膚及襯衣ヲ著色スルコト無キニ在リト

（南溪生抄）

●一新治創藥めらーん

（Centralblatt f. d. gesamte Therapie. 1900. XI.）

エム、ホローウィッツ M. Horovitz 氏ハ本藥ニ就テ報導シテ曰クめらーん（Melan）ハ油樣芳香性ノ液ニシテ化濃及創液分泌ヲ制止シ上皮ヲシテ速カニ肉芽組織上ニ發生セシムル之ヲ潰瘍ニ使用スルニハ綿紗ニ浸シテ之ヲ覆フ豌豆大ノ軟潰瘍或ハ梅毒性原發症ニハ三乃至四回繃帶ヲ施ストキハ平滑ナル上皮ヲ發生セシムルヿヲ得可シめらー

んハ又黄蠟ヲ以テ軟膏(二ト三乃至一ト三)ト爲シ或ハ亞鉛筆麻倔涅失亞巴斯答ト爲シテ用ユベシ殊ニ本藥ノ奏効アルハ梅毒性諸潰瘍、軟性下疳、下腿潰瘍、肛門裂創等ナリ肛門裂創ノ如キハ通常諸藥奏効ナク多クハ括約筋ノ切斷ヲ要スル者ナレ𪜈著者ハ始メ肛門ニこかいん麻醉ヲ施シタル後めらーんニ浸シタル綿紗片ヲ挿入シテ之ヲ治セシメタリ此他めらーんハ包皮匐行疹、龜頭包皮炎、濕疹等ニ良効ヲ奏スト云フ

(南溪生抄)

雜纂

●ビツォツェロ氏小傳

南溪生稿

一たび血液の生理若くは病理を播きたる者は何人もビツォツェロの名と記せざる者あらざる可し氏は伊國有數の病理學者ゐして殊ゑ潛心血液の生理及病理の研鑽ゑ力を致し斯學ゑ貢獻する所頗る多く彼の「血液小板」の如きも實に氏ゑ由て發見せられたるとは夙ゑ吾人の了知する所なり然るゑ今突如として此有爲なる研究家の訃音ゑ接す斯道の爲め深く痛惜に堪へざる也余や玆に近刊獨逸醫事雜誌ゐ載せる所に據り此小傳を作

れる者寔に氏の偉勳と追慕するが爲め而已

ジウリオ、ビッォツェハと伊太利の人、一千八百四十六年三月二十日を以てロムバルダイ州ウォレスに生る初めマイランドの高等學校に入り次デパウヰアに轉じ殊にオェール及マンテガーザに從ひ後ちチューリヒに移りフライに學び伯林に於てい主ふウヰルヒョー翁に師事したりしが一千八百六十二年齡僅かに十六歲にしてオェールの許に在りて始めて「骨の細密ゐる構造に就て」の論文を公ゐし一千八百六十六年パウヰアに於て業を卒れり時偶々伊、澳の役ゐ際し一時身ヲ軍籍に投じたるも一千八百六十七年其師マンテガーザフロレンツゐ聘せらるゝに及び漸く二十一歲の弱齡を以て氏に繼で一般病理學の權敎授に任せられ其講坐を擔任せり氏と又パウヰアに於て自ら一小研究所を創設したりしが氏及其門下より出せる業績は忽ちゐして大に學者の耳目を聳動せり當時氏の業績中特に著名なりしい骨髓の血液製造機能を發見せしゐ在り斯くて一千八百七十三年一般病理學の正敎授としてツーリンゐ聘せられ兼て組織學の私講師となり爾來二十有餘年の久しき其敎職に在りしが本年四月八日享年五十有五、將來尙大に爲を有るの身を以て遂に肺炎の爲に逝けり悲夫

蓋しビ氏は惟り病理學敎授として將た病理研究所の指導者として又其私立組織實習所の指導者として始終勵精倦むと無かりしのみならず又實ゐ著名なる研究家ゐして且現代ゐ於ける伊太利組織學者の首斑たりし人なり其門下亦英材に匱しからずパウヰアのカミロ、ゴルギーの如き、

ポロンヤのチッォニーの如き、ゲヌアのグリッフ井ニー及カナーリスの如き、ッーリンのピオ、フォアの如き、パヅアのサルウ井オリーの如き又シエナのモルプルゴの如き皆其錚々たる者なり而して氏の業績と多く血液と關し就中血液小板及血液形成の發見、腺體の生產及生理的再生其他硬腦膜の腫瘍、出血後の血液變化の如きい最も世に著はる氏い又獨逸語と精通したると以て其業績の獨、澳の醫事雜誌と出でたる者寡からず彼の有名なる „Archivio per le scienze medi che" い亦實に氏の創始と係る者にして該雜誌ハ病理學及組織學界に廣く行とる此他獨逸及歐州各國の國語に翻譯セラレタル „Manuale di microscopia clinica" ハ一千八百七十九年の發行なりしが其第五版の出版されたると實に一兩月前のとなりき

ビ氏人と爲り溫厚篤實而かも精思果斷にして職務と忠實と常に力學勵行毫も懈怠の色おかまとしが晩年不幸にして眼疾に罹りてより以來長く鏡檢に從事そると能はと精力亦昔日の如くおらざりしが遂に一朝二豎の犯す所と爲り復た起つ能はと嗚呼悲哉然れとも氏の赫々たる英名と絶代の偉業とい永く我學界を照らして決して湮滅そると莫かる可し

＊　＊　＊　＊　＊　＊

漫錄

●嚴島詣　殘紅生

四月三日（九州旅行第四日）地い凡て陽に春に

綵色せられたるゐ、曉頃よゑ雨雲浮れ出し其所此所の櫻又と梅の若葉など俯視するよと見られてはてゝ春と喜びてか散る花を悲んでか、涙袖にさゑ敢ぬと云ふ風、ポッ〳〵と降る朝なりき。

詣の一行と凡て七人次の人々なりき岡田講師田中醫員神坂山碕近鄉吉江の諸氏と我なりき。

德山を朝の五時四十分に發して八時宮島着下車す。嚴島通の小蒸瀛客待顏に瀛笛頻と吹きならすに、心宙を飛べども身ゝ思ふ半分も叶はぬ習とて、旅行カバン肩よかけ一町許の所なれば人に後れぢ早くも船に乘らんと急くに、道傍の茶屋の男或と女の客馴れて荷物は御邪魔歸り迄御預り申さうと云ふに、左あるべしと友と一所に預けて急歩すれば、切符賣る所ありて此所には既よ人の群と作り居たり。若し我買ひ需めざる先に船と出んかと、心も心ならず押し合ひ漸く需めて棧橋より船に乘らんとするゐ、はや人の乘り込みて足蹈み入れん場所もあき程なれば之も亦心なの業なれど言葉も待たず泥靴なる片足差入れたるに、紳士紳商或は婦女子の美しく裝ひたるが汚れん事と怖れて席をゆづりたり。是れ幸と甲板に腰下して待てど中々出るさまは見ゑず。小舟の二三人乘せたるゝ既に櫓を押し立てたり小蒸瀛や咄汝と我を急したるよな。

霞籠めたる海上越ゑて嚴島と黑繪の如くぼゐされて松並木と少し濃く空に畫ゐれ海なる鳥居とよく見つむれば夫と現はれて、人家より上る煙は幽ゐ其尾の絕ゆるを見る。內海通ふ瀛船の煙黑く空に染め出して漸く船體と求め得る樣。

兎角する間よ我等の乘りし小蒸氣ハ氣笛海に響かして硝子の如き靜なる美しの靑き海を、裂きつゝ出てぬ。島の景と凡て以前にかはらねど淡墨の一重〳〵漸々剝き去らるゝ樣從ひて宮島驛は淡黑の一重〳〵を重ねぬ。

嚴島に着きて棧橋上れば水兵乘りしボートハ繫かれありき。過ぐる戰に朝霧れのして敵艦挫きし勇兵も之等の人なるやと忍ばれてあづかし。人家ある四五町步めば嚴島神社近く道に海に接し、磯馴松岸に連り翠色滴る。木造りなる鳥居と波打つ所は少し痩せ額面は霞ゐ隔てられ字明のあらぜ。之より數十步廻廊前よ至る鹿二三匹豆腐滓芋など彼等の食物賣るさゝやかある家の前に逍遙す。傍ある廊にある將校の臺灣より捕ひ來りし馬ありとて一頭と入る。何れも詣の人の買ひ與ふるを待つものなり。鹿ありて紅葉谷の名思へ浮べしむ。

九時四十八分の列車よは宮島ゐ歸り乘込まんと の事なれば僅一時四十八時分間にて嚴島參詣し宮島往復せざるべければ、迚も皆の景ハ見盡されぜとあきらめ先づ紅葉谷へと急きぬ。道清く兩側は主よ宮島細工賣る家ありき。買物は凡て見ての戻りと、急ぐ足と忽ち二町計りは越ゑて着きぬ。地然かも廣大葉櫻と綠と白との配合よく散りも初めぜ、紅葉も多けれぜ未だ美しと見る程の葉はあかりしも、旅館料理店の如き三ッ四ッ散ばりて雨降らば水流れんと思はるゝ低地のあたり、葉繁らば埋むる樣に見んと思はるべき所、小綺麗なる亭の一ッ二ッ寂しさうに誰憩ふものなくあるハ貧なる我も一醉を此所に買ひた

く。右の上り得る樣に作られたる小高き岳に登れば、嚴島の勝景ハ一眸の下に眺めてハ我仙人さる如き感ありき。背は綠おせる松並木にて敷かれたる山おり三景の一と數へらるゝ此地何時迄見ても珍らしく見飽る時ハなかるべけれど時間は左も許さねば、惜しくも心をれさゐて立ち出てぬ。秋ならば樹下鹿も來るべく。

歸途宮島細工賣る店に入て價廉なる品なりとも記念に求め行おんとすれば、客を逃さぬ口上巧に追々我ハ思ひぬ物迄買ひ込みたる事なれば、錢や盡んと逃げ出せば神坂近鄕氏等も他の店お頻と買ひ居る時なれバ我も立寄りつ。茲にもうまくあやつられ一品ばかり求め私に懷探り見て去れり。時恰も九時廿分急りざれば間に合はずと思ひしと初よりおれと、店のものゝ迎も間に合ゑぎとと錢取る事にと拔目おき彼等と恨めしかりき。

我と山碕とは彼等を見捨てゝ行きたれど二度と來り得べき地とも定かならぬに唯紅葉谷とはのりにハ話の種にならぬかハ己も亦物足らぬ如き心地もして、特に急ぐとも確お間お合ふと云ふ事おらねバ、一時十八分の瀛車ゑ乘る事とし緩り見物せばやと切出せば、彼も斯くせんと思ひ居りしものか直に賛同しぬ。

廻廊お入らんとそれば履物の儘に入るを禁す但し靴なればと有り、我等は靴穿ちたるも破れかゝり泥も附着し下駄よりは却て汚穢たるべきも靴に相違なきよて得意と蹈み入てぬ。之は左甚五郎の作おりとう何所が優れたりと云ふ所もおけれど滿潮おらば浮むが如たと、其景一度見ま

ほしきも此時と僅よ海水のありし丈け景をよくする程もあし。本殿と普請中無用のもの入るを禁ず他に假殿を設けらる。茲に余は帽を脱して敬禮し廻廊の兩側上よ額面並べし如く得難き品數多ろるべけれど、一々委しく見ん樣もなく廻り〳〵て出口に出てぬ。此所ゐ近き一の室より神樂舞ふ少女らしきが樣よ立てり。其下と水ゐりて美しき砂は數へ得る樣少女は大根を左手に片手よ小刀を手にせり。少女の見つむる方我も眺むれば鹿一頭欲しげに少女見つめて頸延すなりき我等ハ兩者に暫く目を止めぬ。少女と大根輪に切りて投げ出し廻大根ハ鹿に達せず水に浮びたり。鹿と慾に驅られて美しき砂蹈みしだき既ゐ膝を沒しぬ達して漸く口にしぬ。少女又切りて投ーも鹿に達せず進みて腹を浸せり是を恰も少女の下なりき。

廊を出れと青黑き自然石の碑あり「麗しや何より譽めん嚴島(?)」の句を刻む

左に回りて傍ゐ櫻ある小道と登り廻堂と塔あり海ゐ向ひて斷崖のりて此所に太なる臥したる如き松ありた。之が根もとに憩ひ四方眺めつゝ煙吐いて暫しが間燻らし廻。堂と千疊敷と稱す鴨居の上大小杓子數限りおく釘打付られありし其所以我知る能とず。吳海兵團の水兵百余と古參のものに率へられ見物し居れり。將校は宮びやかある家族引き連れ居るもありき。

嚴島の大部を見て歸らんとするに神坂近鄕兩氏ハ各可也大なる籠に盆茶臺等なるべきか手ゐして來るよ遇ひり。强て勸めらるゝゐ從ひ又廻廊を回りぬ。先の所にハ少女及鹿と見にざりき幾

度見るも同じ事ゐればと棧橋指して戻り來。

小蒸氣着き來之と同しく海兵團の者ゐして水兵四五名將校一二名同船したる婦女は將校の妻たるべたか。舷に立ちし一人の將校と我等の目ゐは特ゑ映じぬ。然あるべし君い我校出身の少軍醫武田君なればなり。氏上陸我等の所迄來り何地に行きし事と問とるゝに九州迄旅行し今日有志と宮島に分れたりと答へたれで引率者と誰なるやなど色々話の末皆の人に宜敷とて去られたり。

先ゑ宮島を發せしとと三人足らざりき岡田講師田中醫員吉江氏なりとは先の列車（九時四十八分）ゐ後れじと行きしなるべし。

我等の乘りし小蒸氣い發しぬ一セコンド毎夫れ丈嚴島を去りつゝ鳥居の朧になりし頃宮島ゑつきぬ。行に預けたる茶店ゑ入り三と列車に間に合ひたるやと問ひば今飯認め居らるゝとの事なり夫れならば一層ゆるり見物せしがよゐるべきにと思ひ我等も二階ゐ上り顏見合として笑ふて我等も飯をしたゝめぬ。

先ゑ歸りし人は棧橋ゐつきたる頃恰も一歩違ゑて小蒸氣に乘り後れたりと、次のを待つも面白のらずと舟を雇ふて力任せに漕がせられし由なるが宮島につきし間一髮氣車と氣笛天に響りし黑き煙あとに殘して去れりと其時の落膽如何ばかりの此舟賃恰も四十錢。

午後一時十八分迄は充分に時間ありたれば種々の雜話の後は其刻にもなりて上車し岡山指しぬ

暫くして鳥居は見えすゐりき。

會報

●叙任及辭令

石川縣河北郡直江谷村立小學校醫　安宅治六

石川縣河北郡醫王山村立小學校醫兼務ヲ囑託ス

（以上四月一日、石川縣）

裁判所書記　高柳謙次郎

任金澤醫學專門學校書記　七給俸給與

（以上四月二十二日、文部省）

書記　森川　正名

分教場各所用小使詰所門衛所通常用備品監守及消耗品取扱主任ヲ命ス

書記　永山　一昌

會計掛小使詰所門衛所通常用備品監守及消耗品取扱主任ヲ命ス

（以上四月二十四日、本校）

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス　白井　精一

月俸金貳拾五圓給與

（以上五月三日、石川縣）

庶務掛ヲ命ス　書記　高柳謙次郎

（以上五月六日、本校）

任岡山醫學專門學校教授　上坂　熊勝

叙高等官六等

（以上五月十五日、內閣）

岡山醫學專門學校教授　上坂　熊勝

五給俸下賜

（以上五月十五日、文部省）

仙臺醫學專門學校教授　敷波重次郎

醫術開業試驗委員被仰付

（以上五月十八日、內閣）

賜一等給　陸軍二等軍醫　岩田一

（以上五月二十一日、陸軍省）

京都帝國大學醫科大學教授　鈴木文太郎

本俸三級俸下賜

（以上五月二十一日、文部省）

會計掛ヲ命ス　雇　石黑重義

（以上五月二十一日、本校）

神奈川縣ヘ出張ヲ命ス　內務技師　野田忠廣

（以上五月二十二日、內務省）

教授　木村孝藏
仝　櫻井小平太
仝　小川勝陳
仝　下平用彩
仝　佐々木逵

醫學科及藥學科入學試業倫理科擔當試驗委員ヲ命ス

教授　金子治郎
仝　村上庄太
仝　上田計二
仝　高山基重
仝　石川喜直
助教授　堤從清
仝　末近義介
講師　湯目隆績

醫學科及藥學科入學試業學科國語及漢文科擔當委員ヲ命ス

教授　小川勝陳
仝　下平用彩
講師　湯目隆績

醫學科及藥學科入學試業學科歷史及獨語科擔當委員ヲ命ス

教　授　上田　計二

醫學科及藥學科入學試業學科地理科擔當ヲ命ス

教　授　櫻井小平太

仝　佐々木　遠

醫學科及藥學科入學試業學科數學科擔當委員ヲ命ス

助教授　末近　義介

醫學科及藥學科入學試業學科物理科擔當委員ヲ命ス

教　授　高山　基重

醫學科及藥學科入學試業學科化學科擔當委員ヲ命ス

教　授　金子　治郎

醫學科及藥學科入學試業學科英語科擔當委員ヲ命ス

（以上五月二十八日、本校）

嚴手縣ヘ出張ヲ命ス　內務技師　野田　忠廣

（以上五月三十一日、內務省）

陸軍一等軍醫正七位勳六等　生駒廣太郎

叙勳五等授端寶章

（以上五月三十一日、賞勳局）

七給俸給與　金澤醫學專門學校書記　永山一昌

（以上五月三十一日、文部省）

神奈川縣ヘ出張ヲ命ス　內務技師　野田　忠廣

（以上六月五日、內務省）

書　記　高柳謙次郎

庶務掛校長室生徒控所通常用備品監守及消耗品取扱主任ヲ命ス

助教授　松田　菊治

庶務掛校長室生徒控所通常用備品監守及消耗品取扱主任ヲ解ク

（以上六月五日、本校）

教授　上田　計二

入學志願者体格檢査醫員長ヲ命ス

講師　森島　彦夫

教務囑託　田中　正一

仝　東　艮平

仝　沖野彌一郎

仝　三木　三郎

仝　木下　克雄

病理副手　太田　精一

生理副手　八牧　政孝

入學志願者體格檢査醫員ヲ命ス

（以上六月八日、本校）

叙正六位　從六位　小川　勝陳

叙從六位　正七位　金子　治郎

叙正八位　小野　郁藏

叙正八位　大西　瀨治

（以上六月十日、宮內省）

京都帝國大學醫科大學教授正七位鈴木文太郎陞叙高等官五等

（以上六月十四日、內閣）

石川縣金澤病院醫員　森田　齊次

依願職務ヲ免ス

（以上六月十四日、石川縣）

金澤醫學專門學校教授正六位　高安　右人

叙勳六等授瑞寶章

（以上六月二十七日、賞勳局）

叙正八位　百谷　義一
叙正八位　田中一次郎
叙正八位　神保　正長
叙正八位　田中　正一
叙正八位　諸角　友平
叙正八位　山崎清一郎

（以上六月二十八日、宮内省）

●會員動靜

▲拜謁　山碕校長心得ハ四月三十日午前十時三十分拜謁仰付けられたり

▲森田齊治氏　金澤病院婦人科醫員と辭しられたる仝氏は醫科大學婦人科介補ゑ轉せらるゝ由

▲關屋林之助氏　來る九月頃歸省せらるゝ由

▲村本笹次郎氏　上京後數年研究せられし同氏は五月中歸國せられ小松町に於て開業せらるゝ由

▲大塚正一氏　這回東京駒込病院の嘱托醫となられさり

▲小栗熊次郎氏　皮膚病梅毒科介補として研學せられたりしが六月中歸鄉せられき

▲金子太須計氏　眼科學介補たりしゞの五月歸國せらる

▲河内監次郎氏　鯖江第三十六聯隊在勤三等軍醫同氏ハ今回橋本と改姓せられたる旨通知ありたり

▲鈴木永昌氏　醫學科第三年生在學中たりしゞの過般來脚氣ゐ冒かされ歸鄉加療せられしも不幸六月七日有爲の才と齎らして遠逝せられさり悲哉

●高安教授の歸校

眼科學研究の爲め獨乙國へ留學中なりし同教授と去る六月十二日午後四時廿五分の列車にて歸澤せられぬ。本校職員、生徒及市内開業醫諸氏親戚知己の人々停車場内に滿ち煙火を揚げ旺んに歓迎せり生徒一同教授の健全ゐ歸朝せられたるを祝し萬歳を三唱せり。終て同教授は金澤醫會の發起ゐのゝる歓迎會場なる金谷館ゐ蒞まれたり

●入學試驗

醫學科撰拔試驗及藥學科入學試驗ハ七月二日より行はれたり、醫學科志願者百六十二名藥學科志願者二十三名なりき

●醫專四高連合端艇競漕會

陽春四月百花繁り幽鳥囀るの時、人と皆公園の花に戯れ月に醉ひ止まる所と知らざりし時に當り、我等有志ハ如何でか軟弱腐腸を學ぶべき、腕と大野河流よ練りて軈て其日の來るを待ちぬ。四月十二日端艇會を催す、この一片の掲示は翩々として醫專四高の肉飛び腕鳴り止まぬ六百の勇士を迎へさり。有志の喜何ぞ堪んや。恰も其日午前六時二發の號砲ハ天に轟き我殘夢を破れり覺めて食をなし忽卒我は家を立ち出でさり。春山麗はしく野水潺々悉く皆彩霞を張り常ゐ百姓のみ聞く河北の曠原、今日我校の健兒は三々五々、勝ハ我物敗と我の取らざる所と自ら歸し雄言又鳥聲に和そ。我至れば既に數百は競技順備をさ〳〵怠りなかりし時なり。和光燦然數百の旗旆は水に映じ、輕風徐ゐ來れ

ば小波起り萬色碎く、松籟颯々たる此地知らぬ數時の後大波呼び怒濤渦き大呼歡聲天地轟うんとす。

時八点明朗なる鐘聲に瑞穗、敷島、葦原の三艇は各白赤青の帽と被れる勇士を分載し徐に水を碎て定点に着きぬ。硝煙揭り砲聲響き三艇等しく是れ瞬時後れぬ先んせず櫂聲軋々水を切る矢の如く泡沫頻に飛び龍虎の勢實に當るべからず。觀衆は白と呼ひ青と呼ひ或は赤と呼ぶ。此壯劇を見ては誰か快哉絶哉を連呼せざると得んや。赤の勇士い二艇を後にして決勝点に着きたり。時恰も砲聲又響く喜色滿面賞を受け歸れば胸間燦爛たるナタル其勞を慰めて餘りあるなり。回と重ぬる數十、本日最も觀衆の目を引きしものは職員及醫專四高撰手競漕ゐして終りたるは斜照沒する頃にて、會長と委員を集め慰勞の辞を述へ尙ほ將來勞と惜まざらん事と希望されたり。

●醫專四高弓術競射大會

時維れ五月地凡て百花新に春光麗はしく翠微烟霞と隔て老鶯未だ其跡を絶たす。雪威切なる時爐邊の籠居に日頃の腕のやゝもすれば脆弱に陷らんとする時、此生氣ゑ觸れて再び鼓舞せられ其日の來るや遲しと待ちに待ちし弓術競技大會は五月十二日四高弓術場に開かれぬ。渾身の覇氣勃々抑へ難く午前八時既に斯道熱心家は腕を撫しつゝ觀衆遲しと待ち構へぬ。

午前九時通常射的を初む競射者い年來錬磨せし腕尺的何かあらん、と的定めて滿月ゐ引き絞り、

放てゝ矢聲一鳴貫きしは喜色制し難く仕損せしは低身頭と搔て席を下る此日の主眼目たりしゝ職員競射就中醫專四高の對競射にして、撰手人獨得の技と奮ひ秘と盡し機を失はゞ中々近來の盛會おもき。因ゝ記す本日の競射者觀衆無慮一百。

●御眞影奉迎式

五月十一日午前十時五十分山碕教授は　御眞影を奉戴して着澤せらる職員生徒一同停車場に奉迎し隨供して本校講堂に奉安し午前十一時奉迎式を擧げ校長心得は　勅語を捧讀せられたり

●講話會總會

兼六公園內縣會議事堂及商業學校の一部を借り受け講話會第一ゝ總會を開けり。時維れ六月二日午前六時號砲を揭げて會員諸氏の夢を破り八時第二の號砲を以て開會と報す。門に國旗を交叉し此所ゝ受付と設け中飯、菓子等の數劵を交付す。入れば數百の旗旆ゝ揭げられ朝風徐に搖き左側に幕を打ち繞したるゝ午後餘興と演ぜる所にして商業學校乃一部を事務所に當つ。此周圍ゝ藥學科寄附よりなる鹽里母と饗する所あり他は皆劵を應用し其を求むる所。此所午後ゝ一層の混雜なるべし。

講話會場ゝ議事堂にして木村講話部長登壇開會の辭を述べられぬ其要と記せば本會は學藝の講究職員生徒の一致融和の目的を以て明治廿八年一月に至れ廿九年十一月ゝ至りて必要大に迫り雜誌を發刊し卅三年ゝ至りて校友會と合同せしも今回醫學部は獨立して金澤醫學專門學校と稱

するに至れり。然れ共本會は前述の目的に依り進歩發達を期するものにして恰も此時に際し第一の總會を開きしなり本日特別會員賛助會員及通常會員の盛んに御出會ありしと部長大に之を謝し終りに本會を開くに當り縣廳及商業學校の便宜を充分に與へられさる厚意は又我々の甚だ感謝する所なりと。

第一席。偶感、中島誠君。快活なる辯を以て數千言を連ねられたるも要い國家に立ちて大業を爲さんとする我等なるお我等のクラスには一大惡弊雲の横りあるを慨嘆し之を救治するの道を唯我等相互の間の制裁に外ならぎ云々。

第二席。歐州醫學の日本傳來（獨逸語）、野嶺利七君。日本に傳來してより今に至りし歴史を氏の得意の獨逸語を以て水を決する如く拍手の中に降壇。

第三席。消極的國家衞生論、土田久三郎君。衞生の目的は人体に有害なる物質及作用を除き他い凡ての有害物お對して自己の抵抗力を強むるとの二お外ならぎ而して細胞は外來の刺戟に依りて自体を變化せしむるも亦微有機体に於ける細胞の抵抗力を主としてヌクレーン及アルブミンを以て之が成分を增加せんにを總ての毒物に對して免疫性を得るものなり而して此目的を滿すものを實に運動にして柔道劍道の如きは其最たるものなり云々。

第四席。吐糞症の一例、北川健三君。發生を腸管の狹窄及閉鎖に依るものにして之お腸管内性因と外因性とあり。氏の實驗せられたるい直腸梅毒に依りしものなりと。

第五席。國家と醫師、湯本四郎右衞門君。國家と土地と人民とよりて成立すと說くと密、後醫師の定義及解釋を下し次て兩者の關係と論せんとせられしも時迫り降壇、近來の遺憾なりし。

第六席。內鰐に就て（並に筋肉模型の供覽）、石川教授。教授の巧なる筋肉模型數個は衆人を驚かし後本演題ゑ就て述べられたる內鰐とい內八字を書して步行するもの實わ日本婦人の步行是れあり之が理を究めんと欲して解剖と行ふも少も得る所おのりし然れ共女子の骨盤廣く下肢の短きと步行の際に身体重力を互の足わ移すに最も容易おるは內鰐なりと尙ほ研究の所もあれば他日を期し報告すべしと。

第七席。女卵は細腕わ非ず、佐伯良齊君。細胞の被膜と無組織なり女卵にありてい其膜何なるや成書を繙くも未だ之を載するもの非ず。而して女卵の分裂そるや卵膜能く之に伴ひて擴大そる人是れ無組織のものならざるを証そるものなり若し細胞よりなるものとすれば分裂と共に卵膜おる細胞も分裂して增大し得斯の如くゑ差ある以上い細胞わあらずとて詳細論ぜられたり。

第八席。全肩胛摘出の一例、東良平君。一部切除と大學に報告せられたるものあれ共全摘出ゑ至りては少くも本邦ゑ於て耳わせざる所おり氏が金澤病院に於て實驗せられたるものは肩胛骨より發生せし肉腫に行ひたるものあり。

第九席。虎杖（イタドリ）の含有成分に就て、高山教授。本品の淋疾、痔の下血時に効ありと俗間に唱ふるを耳わし教授は幾多の辛酸を嘗め其含有成分ゑ就て研究せられし者にして其結果わ依れば㨗酸

酒石酸等を有すと報告せられたり。

時恰も十二時第三の號砲あがれり講話會を中止して兼て設けられたる食堂に入り券を通じて食を認め十二時半再び會場に集る。

第十席。熱、森田齊次君。熱は新陳代謝の旺盛に由るものとして此際多少脉に變動を與ふるものなり。我金澤病院救恤患者なる膀胱膣瘻直腸膣瘻を有せしものに体温急に上昇し四十一二度を上下せること數週檢温器をも破りし事あり然れ共其脉は平日に異ならざるを以て疑を存したりしが遂に其僞なると發見せらるとて大に我等後輩の注意を促されたり

第十一席。細菌の速成培養法に就て、上田教授。先輩學者の既に企圖せし所にして教授は主に結核菌を培養せし成蹟を報告せられたるなり教授の輕快なる辯、而かも流暢なる言と頗る聽者の耳と傾け得たり。

第十二席。スペートラヒチス、木村教授。ラヒチスの既に本邦に少きを唱道せられさるーも當病院に於ける實驗中にて決して少きものにあらず特に十才乃至十五歳のものにして屢本病に侵さるゝを見る故に日本にありても地方病性に散在せるものゝ如し云々。

午後一時閉會學生發起の祝賀會に移る山碕芳太郎君登壇祝賀會開會の辞を述べ次て太田美濃里君壇に登り安政四年舊金澤藩壯猶館ニ出仕蘭書飜譯の當時より卯辰山養生所となり後醫學部となり今日の專門學校と稱するに至る沿革と述べ既往と回顧すれば我等の初一念貫徹せし如く誠に我れ歡喜と學生諸氏のものと何れかと是を以

て祝詞に代へらる。

後此場に醫學部一年有志の勇壯快絶の劒舞數番あり其間屢々樂隊の奏樂するあり終りて場を出れば雨降り初め醫學科よりなりし角力と三四年生寄附の劒道とを爲め落膽せし者も有しが有志いとに屈しもせす然も盛ふ會員諸氏乃喝采を博し午後六時全く開散しぬ。因に記す當日の會者は軍醫市内開業醫贊助通常會員諸氏合せて無慮四百五十、會場は立錐の餘地もなく甚だ近來の盛會なりし。

●体格檢査成績　去る四月二十三、二十四の兩日を以て施行せられたる當校生徒身体檢査の結果ゑ依り體格調査の末別表の如き一覽を得たり。

○藥學科

○醫學科

學年	受驗者數	体格	同上別	百人ニ對スル比例
第一年	10	強健	一	一〇
		中等	二	二〇
		薄弱	七	七〇
第二年	9	強健	一	二
		中等	一	二
		薄弱	七	六七
第三年	3	強健	〇	〇
		中等	二	六七
		薄弱	一	三三
計	22	強健	二	九
		中等	五	二三
		薄弱	一五	六八

學年	受驗者數	体格	同上別	百人ニ對スル比例
第一年	125	強健	二九	二三
		中等	三一	二五
		薄弱	六五	五二
第二年	61	強健	八	一三
		中等	一八	三〇
		薄弱	三五	五七
第三年	48	強健	二	二五
		中等	三	二五
		薄弱	二四	五〇

第四年				
28	強健	三	一〇	
	中管	二	七	
	薄弱	二三	八三	
計				
262	強健	五二	二〇	
	中等	六三	二四	
	薄弱	一四七	五六	
合計				
284	強健	五四	一九	
	中等	六八	二四	
	薄弱	一六二	五七	

備考　本表中百八ニ對スル比例欄小數位以下一位ニテ四捨五入法ヲ適用ス

●運動倶樂部競技

曩に我醫學專門學校及第四高等學校相聯合して運動倶樂部あるものを組織し京都第三高等學校へ向け擊劍柔道野球の三運動試合と申し込みたるゐ直ちに彼の承諾を得十有餘名の我校の撰手は去る五月十一日午後四時五十分の列車ゑ乘じて出發せり當日は米原ゐ一泊し翌日午前六時無事着京同日午後一時第三高運動場に於て野球の試合ありしも勝敗なく翌日武德殿に於て午前九時より擊劍、午後一時より柔道試合あり右終りて第四高出身なる大學生諸氏の發起ゑなれる懇親會に臨み終りて第三高の茶話會ゐ臨む落語薩摩琵琶の餘興ありて散會せしと午後十時頃なりしと云ふ翌日午前十時發の列車ゑ乘し午後八時乘車歸校せり我校撰手は次の左し

野球部

三又　梅吉

劍道部

渡邊　十治　永江　直之　須貝瑋太郎

柔道部

湯本四郎衞門　土田久三郎　藤原　敏夫

伊藤　顯德　小町　環　山田伊之助

事務員　山崎芳太郎

右の中小町環氏と柔道試合中負傷せられ大學病院へ入院せられたりしが本月四日全快歸校せられたり

●圖書購求　剩餘金を以て下平氏譯列氏皮膚病學、田代氏譯外科總論、大澤氏著胎生學各一冊宛を購求し十全會書庫に藏せり

●書籍寄附　故中島擴三氏記念として有志諸君よりオット氏生理化學、フックス氏眼科學（共ゐ原書）各一部を本會へ寄附せられたり

●新藥全集前編　本校教授櫻井小平太氏の自著を本會へ一冊寄贈せらる

●學位授與　本會特別會員として嘗て本校ゑ教鞭を執られたる醫學士鈴木文太郎氏及上坂熊勝氏は今回醫學博士の學位を授與せられたり

通信

●久保武氏の書信　京都醫科大學解剖學教室在勤の同氏より去二月十六日左の通信ありたり

（前畧）　當教室には教授鈴木舊師、助教授加門桂太郎學士（元京都醫學校教諭兼校長）あり學士足立文太郎先生と洋行中明年歸朝の筈。助手赤坐素惠吉君ハ一月十六日京都醫學校轉任（月俸百圓）せられたり。現在ハ生及小串子成君及昨年第五出身の岩田鼎氏にて岩田氏と本日助手任命せられたるものゐ候。學生は一年二十五名、二年十名ゐるのみにて大に研究の便宜を得喜び居候

當地に於ける同窓としてゑ石森國臣（當校生

理學在勤助手)、高松清松(京都府監獄醫勤務)の兩君あるのみ時々往復致し居候

卒業生諸君の御參考迄一寸申述べく候撰科生と專修生と稱す、當大學外科と有名なる伊藤博士(猪子博士と先日洋行)內科と笠原學士賀屋氏と助教授を各擔任せられ居候。當大學治療科の方と目下尙學生のクリニックに出るものなきが爲め今明年位迄と專修生も亦責任を以て患者の一部を所置する事となり居り特に外科なども手術の經驗を大に得らる由、之を東京大學なる比し實際上利益あり眞に唯一年位專攻せんと欲する諸君と寧ろ京都にて實地磨すること方得策ならんと存候(治療科の助手と悉皆京都醫學校卒業生の如し)

入學出願期い九月迄にて可なり入學い高等學校卒業生なしても一般に試驗(獨乙語)をなし採用する由、程度とポックの三位にて又專門書を數行讀ませ見て其良きものを採るものなりと併し大した事となのらんも兎に角何よせよ大に獨乙語の必要あれば勉强肝要と存候。

昨年專修生志願者各二十名(外科い少し多かりし)より十二名位つゝ採用せりと、今年と多少志願者多かる可く候。眼、婦人科等と未設ならん

當地に於て獨乙語と學ぶなは東京に比して不便なるも東京にありしシルレル氏も居り他なに二三ヶ所有之候

●松原三郎氏の通信

(前畧) 村本笹次郎君(二十七年卒業)は上京後共濟生命保險會社囑托醫として勤務せられ

たるも一昨三十二年九月より小倉君と共に大學内科撰科に入りて熱心に勉學せられ撰科を修了せられ後昨三十三年八月頃東京駒込病院の囑托醫となり次で大學助手となりて尚ほ該病院に於て專ら傳染病學と研究せられつゝありしも去る五月廿九日歸國せられたり聞く同君と小松氏に於て開業せらるべき筈なりと蓋し同君と性沈着温敦にして事を執るや堪忍熱心なれば大に手腕を振ふて勉めらるゝことゝあらん仝君送別のため在大學同窓者一同撮影せり

大塚正一君は昨三十三年九月上京して衞生黴菌學撰科研究中の處此度村本君の後任として駒込病院の囑托醫となられたり併し駒込病院にて大學助手三名ありたれども去る五月より仝廢せられたり

川北辰吉君（甲種醫學校卒業？）は先年上京して眼科撰科に入り續て四五年間滯京勉學せられたる後越前國三國に於て眼科を主として開業せられつゝありしに去る四月再び上京して傳染病研究所に入り傍ら河本氏宅に趣きて眼科を研究せられつゝあり

神保正長君は先頃上京せらるたるも目下如何にして且つ何を研究せられつゝあるやを知らず

池田秀雄君は去る三月上京後醫科大學第一醫院内科を傍觀せられ研學中なり

小栗熊次郎君と兼て上京せられ皮膚病梅毒科の介補となりて勉學中なりしも今六月鄉に歸られたり金子太須計君は眼科介補として第二院甲野氏より第一醫院河本博士に轉じて研究

中なりしも去五月歸鄕して開業せられたり

榮枯盛衰あらせして新陳代謝とも云ふべき歟近來吾が校出身にして大學に入り以て理論の薀與と實藝の巧熟とを修得せんと勉む者甚だ多く陸續として絶えず益々增加して他の醫學校出身者に比し嶄然として優に頭角を顯せるも曩きに敷波重次郎、久保武、山崎秋津磨、大澤五月、小倉加一郎、辻岡律、田上淸貞、吉田幡誠君等と失ひ今又村本笹次郎、小栗熊次郎、金子太須計君と失ひ甚だ寂莫の感に堪へざ而して新たに來る者の尠きと何故ぞや慨嘆のいたりにこそ嗚呼是亦一頓挫歟、一段落歟、一代謝歟、遠大の抱負を抱ける青年何ぞ蹶起せざるや不拔の勇志と抱ける男子何ぞ逡巡するや猫額大の僻地に齷齪して碌々たるは策の得たるものに非ず青雲の志ある者須く來りて新橋の停車場を濶歩せよ水道の蛭、大學のペスト恐るゝ所にあらざ

森田齊次君は近日中に遊學の爲め上京せらるゝ筈なり一人にても同窓の上京すべしと云ひ越せざ何となくなつかしき心地するも人の情の常なり

其他には異りし事なし小生と愚母の微恙のため此暑暇に入り暫時（七月中旬又下旬ころ）歸省そるやもとかられざ多分歸りたき考なるも少しく多忙の事あれい未確定なり

先日送り届けたる外の會費は例會の席上にて徵收次第送り申すべし兎角會合ありとも飲席する人もあるにより漏れなく徵收すること能とざると遺憾なり

例によりてながくなりたれば此處に下手の筆と止めん

次號の雜誌の一日もとやく發刊せられんことを祈る

終りに十全會役員諸氏の勞を慰して益々健康ならんことを遙かに祈る

附　石森國臣（京都大學生理助手）君は電魚研究のため同大學より神奈川縣三崎の理科大學實驗場へ出張と命せられ去る十九日上京せられたるに明二十三日當地より伊豆三崎に起き四五日間滯在の上歸校せらるゝ筈なり

六月二十二日深更

公　文

●內務省令第十六號

醫籍藥劑師名簿編成竝加除訂正規程左の通り定む

明治三十四年六月七日

內務大臣　男爵　內海忠勝

醫籍藥劑師名簿編成竝加除訂正規程

第一章　總則

第一條　道廳府縣廳郡市役所及町村役場には醫籍藥劑師名簿を備置くべし

醫籍藥劑師名簿は醫師藥劑師現在調査票を以て調査と行ひ之を編成すべし

前項の調査は明治三十四年七月三十一日現在

に依り之を行べし

第二條　醫籍藥劑師名簿の加除訂正は醫師藥劑師動態調査票に依り之を行ふべし

第三條　現在調査及動態調査の調査票並郡送致目錄及市町村送致目錄の用紙は內務省より之を道廳府縣廳に配達す

第四條　醫師藥劑師の現在調査及動態調査を市町村長之を行ふべし地方長官必要ありと認めたるときは警察官吏をして前項の調査を補助せしむることを得

東京府に於ては警視總監東京府知事協議し此の調査を行はしむべし

第五條　現在調査及動態調査の調査票並其の市町村送致目錄郡送致目錄道廳府縣廳送致目錄記入方は附錄記入例に依るべし

第六條　此の規程に於て市町村長又は市役所町村役場とあるは市制町村制を施行せざる地に於ては市町村長の職務を行ふ吏員又は其の吏員の職務を行ふ役場を云ひ東京市京都市大阪市及明治三十三年勅令第九十八號に依り區を置きたる市に於ては區長及區役所を云ふ

北海道及沖繩縣の區は市に準ず

郡役所とあるは北海道に於ては支廳を云ひ島廳を置きたる地は於ては島廳と云ふ

第二章　醫師藥劑師現在調査

第七條　道廳府縣廳は於ては內務省より配達したる用紙と明治三十四年六月二十日までは各郡役所町村役場に配付すべし

第八條　市町村長は調査期日は於ける其の市町村內現在の醫師藥劑師を調査し各一人の記入

事項を各一葉の調査票に記入すべし

市町村長は前項の調査に基き市役所又は町村役場に備へ置くべき醫籍藥劑師名簿を編成すべし

市町村長は醫籍藥劑師名簿を編成し了りたる後調査票を一括と爲し市町村送致目錄を添へ明治三十四年八月三十一日限り市長と道廳府縣廳に町村長と郡役所に回送すべし

醫師及藥劑師の現住者なき市町村に於て市町村送致目錄のみを前項に準し回送すべし

第九條　郡役所は於れと町村長より回送し來りたる調査の枚數を市町村送致目錄と照査し若符合せざるものあるときと町村長に通知して訂正せしめ完備せる調査票に基き郡役所に備へ置くべき醫籍藥劑師名簿を編成すべし

郡役所に於ては醫籍藥劑師名簿を編成し了りたる後調査票の枚數を市町村送致目錄と照査し郡送致目錄を添へ明治三十四年九月三十日限り道廳府縣廳に回送すべし

第十條　道廳府縣廳は於ては市長より回送し來りたる調査票の枚數と市町村送致目錄と照査し郡役所より回送し來りたる調査票の括數並市町村送致目錄の枚數を郡送致目錄と照査し若符合せざるものあるときは郡役所又と市長は通知して訂正せしめ其の完備せる調査票は基き道廳府縣廳は備へ置くべき醫籍藥劑師名簿を編成すべし

道廳府縣廳は於ては醫籍藥劑師名簿と編成し了りたる後調査票の枚數を市町村送致目錄と照査し調査票の括數及市町村送致目錄の枚數

を郡送致目錄と照査し道廳府縣廳送致目錄を添へ明治三十四年十月三十一日限り內務省に回送すべし

第三章　醫師藥劑師動態調査

第十一條　動態調査は調査票及市町村送致目錄郡送致目錄用紙は每年四月中內務省より道廳府縣廳に配送す

道廳府縣廳に於ては前項の用紙を五月三十一日までに各郡市役所町村役場に配付すべし

郡市役所町村役場に於ては使用し餘りたる用紙を次年の用に供すべし

第十二條　市町村長は其の市町村內現住の醫師藥劑師に左の異動ありさるとき之を調査票に記入すべし

開業　休業　復業　廢業

本籍變更　族籍變更　改姓　改名

他の市町村より來住　市町村內の轉居　他の市町村へ轉居　海外移住　海外旅行　歸朝

失踪決定　失踪取消　死亡

其の他の異動

市町村長は前項の調査票に基き市役所町村役場に備ふる醫籍藥劑師名簿を加除訂正すべし

市町村長は前項の加除訂正を了りたる調査票を六箇月每に一括と爲し市町村送致目錄を添へ左の期日市長は道廳府縣廳に町村長は郡役所回送すべし

第一期　一月二月三月四月五月六月中の分

右發送期日　七月三十一日

第二期　七月八月九月十月十一月十二月中の分

右發送期日　次年一月三十一日

醫師藥劑師の異動なき市町村ハ於テハ市町村送致目錄のみを前項ハ準し回送すべし

第十三條　郡役所ハ於テハ町村長より回送し來りたる調査票の枚數を市町村送致目錄と照査し若符合せざるものあるときは町村長に通知して訂正せしめ其の完備せる調査書ハ基き郡役所に備ふる醫籍藥劑師名簿を加除訂正すへし

郡役所ハ於テハ前項の加除訂正を了りたる後調査書の枚數を市町村送致目錄を照査し郡送致目錄を添へ左の期日に道廳府縣廳に回送すへし

第一期の分　發送期日　八月十五日

第二期の分　發送期日　次年二月十五日

第十四條　道廳府縣廳に於ては市長より回送し

來りたる調査書の括數竝市町村送致目錄の枚數と市町村送致目錄と照査し郡役所より回送し來りたる調査書の括數竝市町村送致目錄の枚數を郡送致目錄と照査し若符合せざるもの あるときハ郡役所又ハ市長に通知して訂正せしめ其の完備せる調査書に基き道廳府縣廳に備ふる醫籍藥劑師名簿を加除訂正すへし

道廳府縣廳ハ於ては前項の加除訂正を了りたる後調査書の枚數を市町村送致目錄と照査し調査書の括數及市町村送致目錄の枚數を郡送致目錄と照査し道廳府縣廳送致目錄を添へ左の期日ハ內務省に回送すへし

第一期の分　發送期日　八月三十一日

第二期の分　發送期日　次年二月二十八日

會告

●寄贈書目

政教新聞　每號　同　社
中外醫事新報　五〇七、八、九、一〇、　同　社
齒學研鑽　二卷四、五、　富安齒科治療所
京都醫學會雜誌　一六〇、一、　同　會
日本醫事週報　三三六、七、八、九、三〇、一、二、三、　同　社
醫海時報　三六一、二、三、四、五、六、七、八、　同　社
日本助產婦新報　三九、四〇、　高橋產婆學校
東京醫學會雜誌　十五卷九、一〇、一一、一二、　同　會
東京醫事新誌　一二〇三、四、五、六、七、八、九、　同　局
軍醫學會雜誌　一一九、二〇、　同　會
醫事新聞　五八九、九〇一、　同　社
成醫會月報　二三〇、一、　同　會
藝備醫事　五九、六〇、　同　會
醫事會報　一〇八、一〇九、　緒方病院研究會
助產ノ栞　五九、六〇、一、　緒方病院助產婦學會
國家醫學會雜誌　一六九、　同　會
醫學士中原貞衛譯　外科手術後療法論　自卷ノ一至卷ノ三　下平教授
產科婦人科學雜誌　第三卷五、六、　同　會
獨乙語學雜誌　第三年　九、一〇、　同　社
北越醫學會々報　一三三　同　會
赤痢即治療法　一冊　田中正鐸君
大日本耳鼻咽喉科會々報　七卷五、　同　會
藥學雜誌　二三一、　同　會
斯氏內科全書　一卷ヨリ六卷マテ　山碕校長
醫談　六二　奬進醫會

公衆醫事　五卷四、　同　會
日本眼科學會雜誌　五卷五、　同　會
衞生談話　五、　通信衞生茶話會
廣島衞生醫事月報　二九、　同　社
岡山醫學會雜誌　一三六　同　會
新藥全集　前編　櫻井敎授
妊婦産婦養生訓　高橋只志君
オット氏生理化學（原書）
フックス氏眼科學（原書）　故中島擴三君紀念書目發起人總代河野勇君
アルベルド外科疑診斷學（原書）
エスマルヒ軍陣外科學（原書）
ハルトマン耳科書（原書）　木村博士記念書寄附發起人總代蓮村外男久保武君
外科診斷學　一部
臨床診斷學　一冊
約氏臨床診檢法全書　一冊
黴毒學　一部
新纂衞生學　一部
維傑爾婦人科學　二冊
婦人科手術學　三冊
珠氏産科學　二冊
緒方高橋産科學　一冊
原譯對照克氏外科各論　一冊
法醫學提綱　五冊
ペスト病論　一冊
實用眼科學　三冊
儒氏內科新書　二冊
愛氏內科全書　五冊

下平敎授

●會費領收

明治三十四年六月　日迄

一金壹圓　（自一五號至二一號）贊助會員　松浦　啓三君

一金六拾錢　（自一〇號至一三號）仝　大澤　五月君

一金九拾錢　（自一七號至二二號）仝　森田　齊次君

一金壹圓五拾錢（自一六號至二五號）仝　木下　克雄君

一金六拾錢　（自一五號自一八號）仝　中西政太郎君

一金壹圓五拾錢（自一五號至二四號）仝　藤岡　勝治君

一金壹圓五拾錢（自一四號至二〇號）仝　廣野喜久雄君

一金四拾五錢　（自一七號至一九號）仝　橘　董君

●會告●

○小倉加一郎氏　新潟縣長岡甲野病院宛

○藤井榮四郎氏　名古屋市茶屋町六十一番地宛

○岡部元次郎氏　東京共濟生命株式會社宛

右三氏ヘ本誌第十八號郵送致候處附箋添ヘニテ再ビ本會ヘ返戻シ來リ候間會員諸君中右三氏ノ新住所御存知ノ御方ハ何卒御一報ノ勞ヲ吝マレザラヿヲ希望致候

十全會雜誌部

一金貳圓拾壹錢也

右者昨秋醫學科卒業生諸君ヨリ集金セルモノヽ内十全會ヘ寄贈セル書籍代及諸雜費等ヲ除キタル剩餘金ニ有之候ニ付テハ更ニ十全會ヘ書籍代トシテ寄贈致シ尙書籍ノ撰擇等ハ凡テ該會雜誌部委員諸君ニ依賴申候間此旨卒業諸君ニ及廣告候也

右殘金處分委員　河野　勇

會員諸君に告ぐ

次回發行の本會雜誌第二十號は來る十月刊行の豫定に付會員諸君は原著たり抄錄たり漫筆たり將た通信たり續々玉稿を御投寄あらむことを希望す

十全會雜誌部